



[第一章]

とりあえず
動き出すかも
しれない



弘忠

誰であろうと邪魔されたくない一時ひとときというものは、それぞれに存在するかと思う。例えば——溜まった仕事を集中して片付けてしまいたいときだったり、あるいは疲れた心身を癒いやすための趣味の時間だったり、いろいろである。

そのように、いい意味で「独り」になれる瞬間というのは何物にも替え難い至福のときだ。そして、嬉しいことにその幸せは、僕の場合、ワンコインで購入した文庫本を開くだけで手に入れることができる。ゆったりとした音楽があれば、なおよい。

この読書という趣味の大きな利点は時間と場所を選ばないことである。ちょっと人を待つときなんかにも、いつでもどこでもすぐさま独りきりになれるのがよい。

「ねーねーちよいと、長谷川君はせがわ、きーてるのー？」

そう。今日もまた、僕は本の世界を一人旅。

「ねー長谷川君。ねえってばーほい。ほいさほい」

誰にも邪魔されない、僕と本との静かな対話。

「聞いている？ もしもーし？ もすもす？」

三到して尚友。

「もすもすってゆつてるじゃーん。もうう」

集中夢中。

「もうもう。ぶーぶー。わんわん！ がうっ！」

……。

「あ、ねえねえ、そのコアラのマーチを一つあたしにもおくれよ」

……今日はノイズが酷いな。

「うーんポリポリ。コアラのマーチさえあれば、たげのこき骨と茸で骨肉の争いを繰り広げていることなんてポリポリ、なんだかとても小さな世界のことのように感じるよねえポリポリ」

うるさい。

僕は文庫本をひとまず閉じた。そして、大学のラウンジに設置された野外テーブルの対面に座す女性に呼びかける。

「玉井」

「お。やっと反応してくれたー」

「僕は今、本を読んでいる」

「見りゃ分かるよう」

「できれば、一人静かに読みたい」

「え？ さっきまでそうしてたじゃない」

「いや、だから、ちよつと静かにしてくれないか」

「ええっ!? もしかして、あたしうるさかった!?」

「うん。とてもうるさい」

「やーそりゃ悪かったねー。全ッ然気付かなかったよー、失敬失敬」

「や。あからさまにわざとうるさくしてただろ」

「むー。だって、長谷川君が無視するんだもん」

「だから、僕は今、本を読んでいる」

「さっき聞いたよう」

「それから」

「？」

「そのコアラのマーチは、僕のだ」

「とつてもおいしいわあ。ありがとねえ」

「あげるとはいってない」

「うええええええ。ケツチくさーケチンボー」

そうこぼしてから、玉井香織かおりは渋々と僕のコアラのマーチを手放した。どうでもいいが、彼女のいった「一つ」とは箱一つという意味だったのだろうか。だとしたらとんだ大物である。

僕は返却されたスナック菓子を、一口口に放り込んだ。

「で、一体なんの用？」

「え？ 用なんてないけど」

「なら、なぜ僕の読書の邪魔をする」

「いやいや、せっかく同じクラスの子が同席してるんだから、ちよいとくらしいお話しようという気にもなりましようよ」

「だから、なんの話なのかと聞いている」

「え？ 話なんてないけど」

「なら、なぜ僕の読書の邪魔をする」

僕が再びそう問うと、玉井は俯うつむいて小刻みに震え出した。

そして、急に腹を抱えて笑い出した。

「おはっ。あははははっ！ ちよっ！ 長谷川君！ これじゃきりないってー。ねえねえ、

それってさ、わざとやってるわけ？」

「その台詞せりふはそのまま返そう」

「ぶっふー！ まあまあ。ちよいとくらしい女の子とお話ししてもいいじゃないの。だいたい長谷川君、こないだのクラス会にも来なかつたじゃない」

「クラス会？ あったっけ？」

「あつたよー。メール回ってきたじゃん」

「ああ」

そういうえば、どこの誰とも分からぬアドレスから、むやみやたらとテンションの高いお誘いのメールが来たような気がしなくてもない。新手的出会い系迷惑メールだとばかり思っていた。

「あやうく、アドレスを変更するところだった」

「長谷川君、一回も来たことないよねー。あたし結構話してみたのに」

「はあ。それはまたなんで？」

「いやいや、だって、せっかく同じ地元の子とクラスメートになれたんだよ。ちょっとはどんな人か気になるものでしょう？」

「や、僕は全然ならなかったけど」

「ちよいと！ わりとそーゆうことを平然といつてのけるのね」

「まあ、それはともかく。玉井って僕と同郷なんだ」

「えええっ!? あたしさつきから、てゆうか今までも何度か強調してきたのにつ！」

「ふーん。そうだったんだ。そのわりには垢^{あかぬ}抜けてるね」

「あら。ありがとー」

「ところで」

「うんうん。なにになに？」

「大学に、クラスなんてあったっけ？」

僕がそういうと、玉井は大きさにテーブルへと突っ伏した。

「あるようっ。クラスの皆でご飯食べに行ったり、だからこないだもクラス会やったりとか、いろいろやってるじゃんっ」

「ああ。あれ、クラスって括りで行われてたんだ」

「そ、そこから？ クラス以外になんの括りがあるわけ？」

「や、なんか必修講義の人達だけ、妙に仲がよさそうな気はしたけど、特に考えたことがなかった」

「必修がそのままクラスになるんだよう。初日に自己紹介とかもしたじゃん」

「したっけ？ 覚えてないなあ」

「そ、そんな。じゃあ、わざわざあたしが出身地を強調しといた自己紹介、忘れたの？」

「うん。自分がなにをいったのかさえも忘れた」

「えっとね。長谷川弘忠ひろただです。出身は丁県で趣味は読書です」

「最高つまんなそうな奴だね」

「そうだね。あたしも同郷じゃなかったら確実にスルーしていたよ。でも、そういえばあたしあのと、長谷川君に一声掛けたじゃん。それで、実家もわりと近くなんですわー奇遇ですわーみたいによろしくしたじゃん。まさか、それも忘れたわけ？」

「あつたような。なかつたような」

「なんとまあ。だいたいさあ、長谷川君いつも講義が終わった瞬間に、即刻立ち去ってしまうでしょ。声の掛けようがないよ」

「え？ 他の人達は帰ってなかつたの？」

「そうだろう。おしゃべりしたり、そのままご飯行ったり、いろいろ楽しいんだよう。今度一度来てみなよ」

「うーん……」

腕を組んで、一考した。

「楽しいかもしれないけど、どちらかといえば本を読んでいたいな」

玉井が再び音を立ててテーブルに崩れた。

「第一、そのほうが経済的じゃないか」

「あ、あのねえ……本なんていつでも読めるでしょう？」

「そう。それが読書のいいところ」

「くっ、なかなか手ごわいね。じゃあ、もしかして、長谷川君、家に帰ったら？」

「だいたい本を読んでいるね」

「休日は何？」

「基本的には、本を読んでいるね」

「休憩時間は？」

「間違ひなく本を読んでいるね」

「本ばっかじゃーん！」

そう叫んだ玉井は、なぜか僕のコアラのマーチを奪い取った。

「いやそれが、ご飯食べたたり、風呂に入ったり、睡眠をとったりで、そもいかないんだよ。

あと僕のコアラのマーチを返せ」

「ダメダメ。それじゃ駄目だよ、長谷川君」

「いや、それは僕が自分のお金で、自分が食べるために買ったものだ。ちよつとおい、一口で二個食べるとか、人間の所業じゃないぞ。お祖父ちゃんが子供の頃はお米が」

「長谷川君はまず、もつともつと、人と人との繋がりつなを大事にする必要があるよポリポリ」

「いや、まずはコアラのマーチをだな」

「あれ？　でも、そういえばなんで今日はまたこんなところで本を読んだの？　いつもなら帰ってるわけでしょ？」

玉井が空き箱を近くのくずかごへと投げ込みながら聞いた。——彼女は腹に秘めた食欲と、綺麗なシュートフォームを持っていた。いや、ちよつと待て。

「ありえない……。半分は残しておいて、また明日日本を読みながら食べるつもりだったのに！」

「ねえねえ。なんでまた今日は学内に残ってたの？」

「全然聞いてないな。や、今日はちょっと、友達と待ち合わせをしているんだ」

「え？ 長谷川君、友達いたの？」

「なかなかどうして、失礼なことをいう」

「いやいや、わりとお互い様だっぺー」

玉井がわざとらしく爽やかに微笑んだ。僕はため息を一つつき、どこか諦めて座り直した。

「ああ。そういえば」

「？」

「これから来る奴も、僕達と同郷だよ」



啓太

待ち合わせは好きだ。その人となにをしようか、なんの話をしようか、なんてことを考えながら歩を進める。わくわく感が胸を満たす。

独りきりだと鬱陶しく感じる人ごみも、自分が誰かと会う約束をしているときは不思議と皆が楽しそうに見えて、こちらまで楽しい気分になってくる。現金なもんだ。

もつとも、その期待感も誰と待ち合わせているかによって度合いが異なる。つまりは男性よ

り女性のほうが望ましく、さらにいえば美人さんだとおよい。そしてもっと付け加えるなら、性格は明るくて、優しく、でも結構お茶目なところもあつたりして、笑顔の眩まぶしいような子なら堪たまらない。それからそれから、髪は黒髪のセミロングで、目は大きくて黒目がちのどんぐり眼まなこで、唇は小さく整つており瑞々みずみずしく、服のセンスもござっぱりとしないながら洒落しやれていて、化粧は控えめで足も綺麗で胸は——まあ、それなりにあればもはやいうことない。完璧である。そこまで完成された「美」というものは、既に人間の枠を越え、それはそう、天使と呼ばれ称されるべき存在であるからして信仰に値す——

はて、俺は一体全体なにを考えていたんだっけ？

そうそう。待ち合わせだよ。そして、残念ながら本日の俺の相手は女性ではないのである。腐れ縁という言葉がこれほどしつくりくる間柄もない友人が待ち人だ。その名を長谷川弘忠という。暇さえあれば常に本を読んでいる眼鏡星人めがねで、もうホント、とにかく眼鏡だ。眼鏡としか表現のしようがない。多分、生みの親も眼鏡だ。父、レンズ。母、フレーム。

いやま、実際は凄いい感じのいいご両親なんだけどぬ。

そんな眼鏡弘忠と俺の出会い、小学三年生までさかのぼる。

友情が芽生えたきつかけは、当時給食の人気デザートであった「温州みかんゼリー」という、いっす清々すがすがしいほどに捻ひねりのないネーミングをした代物しろものを、弘忠に分けてあげたことだった。俺はどちらかというと「温州みかんゼリー」よりも「二十世紀梨ゼリー」のファンだったのだ

が、いつも眼鏡であった弘忠がまるで子供のよう（事実子供なのだ）とても幸せそうな表情でゼリーを愛でる様に興味を引かれたのだ。

気持ち悪くなってしまうから、自分の分も食べてくれないかという趣旨のことを弘忠に尋ねた。気持ち悪くなったというくだりは、もちろん俺の優しさである。幼いなりに、俺はそういった心遣い（こころづかい）をわきまえていたのだ。偉いなあ。大切にしよう、これからもずっと。

そのときに見た弘忠の顔は、今でも忘れられない。

狐につままれたような顔をしてから、数秒後に喜色満面になった。そのまま、照れくさそうに「うん、ありがとう」といって頷く弘忠は、今の奴からはおよそ想像ができないほどにかわいげがあったものだ。期待以上のリアクションには思わず吹き出してしまった。微笑ましい歴史である。デザートの一つや二つの対価としてはお釣りがくる、貴重な出来事だった。

その日のことは、俺にとつては普段あまり関わりのないクラスメートと珍しいやり取りをした程度に過ぎなかったわけだけど、数日後に思わぬことが起こった。

給食時間にエビフライを食（む）べる俺に、なんと弘忠の側から、「あの、エビフライ、いる？」と、これまた照れくさそうにかわいらしく聞いてきたのだ。その台詞は唐突ではあったが、感受性豊かな幼き頃の俺は、それだけで弘忠の意図を了解した。

いや、それは後付けであって、単にエビフライをもう一本食いたかっただけだったかもしれないがとにかく、給食の好物メニュートレードが、一つの友情（とも）を紡ぎ出したわけだ。

それから俺達はちよくちよく遊ぶようになり、どういう加減か意外と気も合ったため、なんやかやと時間を共有し出した。そして、気付いたときにはバンブーホースフレンドとなっていたのである。

進学先も中高大とずっと同じ。別に合わせているつもりはないのだが、なぜか被^{かぶ}ってしまった。このように切っても切れないからこそ腐れ縁と評されるわけだ。もっとも、さすがに学部まで同じということにはならなかったのだ、以前ほどは一緒にいることも少なくなってきた。ちなみに、弘忠は文学部、俺は社会学部だ。

付き合い出すにつれて、弘忠は単なる純真な文学少年ではないことが明るみに出た。奴は、無口ではあるが無垢^{むく}ではなかったのだ。

もうずいぶんと親しくなった中学校時分のある日、夕暮れを見据えながら、なにか思い出したかのように弘忠は呟^{つぶや}いた。

——僕さ、エビフライって大嫌いなんだよ。

ぼんやりとノスタルジックな気分浸っていた思考が、学部棟の外に出て霧散した。今日はいい天気だ。日差しが無駄に力強い。

弘忠とは構内の最寄りのラウンジで待ち合せている。約束した時刻から、既に三分ばかり過ぎてしまっていた。弘忠は時間にうるさい男なので、先に到着していることは疑いない。

俺は目を凝らして、人出の中から幼^{おきなな}馴染^{なじみ}の姿を捜した。どうでもいいが、視力には自信が

ある。裸眼視力両眼共に2・0。

——おお。いたいた。今日もまた、眼鏡が太陽光を反射しておる。

呼び掛けようとして一息吸った俺は、そのまま息を呑んだ。

弘忠の隣に、天使がいたのだ。